



三井造船システム技研株式会社
システム企画研修株式会社

業務を整理・検討するための標準的な業務プロセスモデルは、その必要性が以前から強く訴えられながら、開発困難性から日の目を見ませんでした。

しかしながら、本格的に業務を分析・検討するにはどうしてもそのような業務プロセスモデルが必要となります。

最近ではERPやSCM（サプライ・チェーン・マネジメント）などかなり広範囲の業務を抜本的に見直す検討の機会も多くなり、その必要性はさらに急速に高まっています。

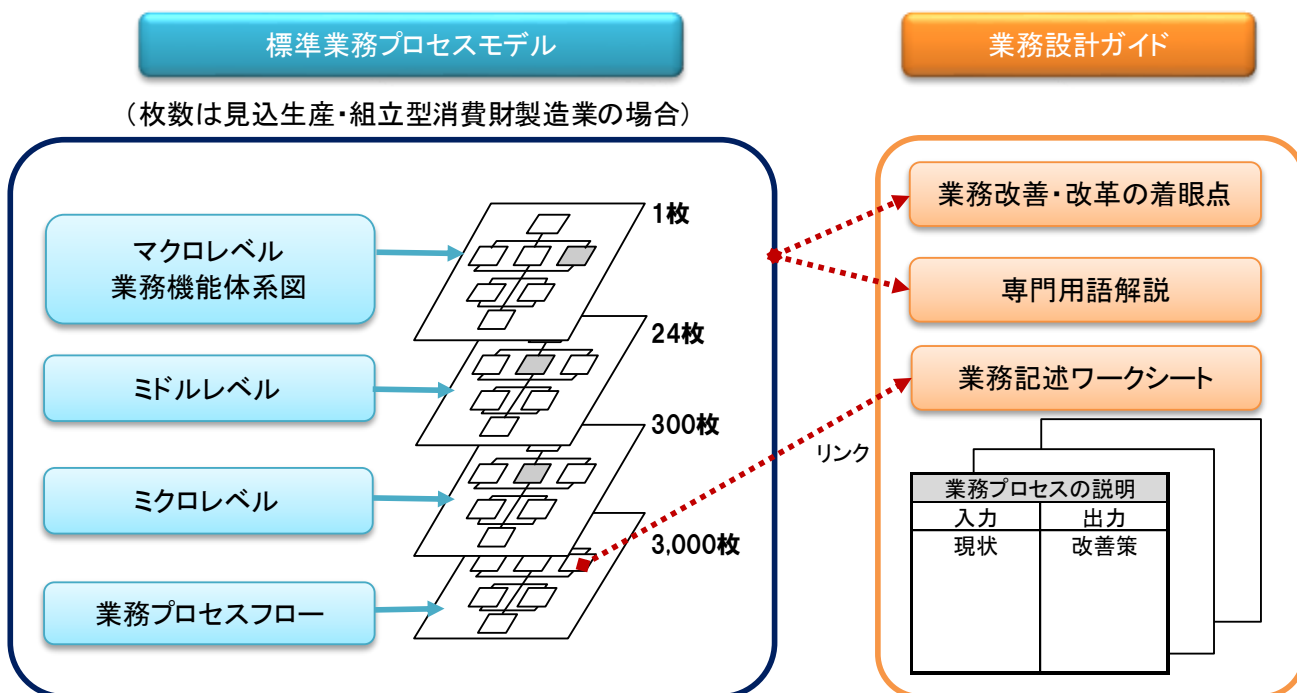
そこで、3社（三井造船システム技研(株)、(株)Nix システム研究所、マインドリサーチ(株)（現 システム企画研修(株)）の業務に強い各分野のコンサルタントの経験を糾合して、このPDRを開発いたしました。

PDRは、日本初であり日本発の標準業務プロセスモデルと、それを前提にした業務設計ガイドです。標準業務プロセスモデルは業務を検討するフレームとなるものですが、それぐらいは日本で開発し利用したいという願望で、かなりの苦勞をして開発したものです。これから皆様のご支援を得て、このPDRを日本のデファクト・スタンダードにしていきたいと思っております。

以下にPDRの概要をご紹介しますが、ひとこと言えば、PDRにより、業務の理解・検討・整備・設計が飛躍的に「早く、うまく、安く」なります。

このPDRの概要は、P.11の5W2Hのとおりです。

◆ 図1 PDRの全体関連図



1 PDRの内容

PDRは、以下の10業種分を対象としています。

- 見込生産・組立型消費財製造
- 受注生産・部品製造
- 見込生産・装置型消費財(化学製品)製造
- 見込生産・装置型消費財(発酵食品)製造
- 見込生産・装置型消費財(医薬品)製造
- エンジニアリング
- 日常生活財卸売
- チェーン・ストア(GMS)
- レストラン・チェーン
- 情報サービス

- 見込生産・組立型消費財製造業
- 受注生産・部品製造業
- 見込生産・装置型消費財
(化学製品、発酵食品、医薬品)製造業

のPDRは、以下のような製造業モデルとして作成しており、列記した業種等でご利用いただけます。

なお、装置型生産財製造の場合は、一部の業部を除き、見込生産・装置型消費財(化学製品製造)をご利用いただくことが可能です。

業種	適用可能な製造業
見込生産・ 組立型消費財製造業	<ul style="list-style-type: none"> 家電 情報通信機器 精密機器 玩具 自転車など
受注生産・部品製造業	<ul style="list-style-type: none"> 自動車部品 家電部品 情報通信機器部品 精密機器部品など
見込生産・装置型消費財 (発酵食品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> 食品醸造 酒類醸造 バイオ薬品製造など
見込生産・装置型消費財 (化学製品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> トイレタリ 飲料など
見込生産・装置型消費財 (医薬品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> 医薬品 化粧品など



お問い合わせ

システム企画研修(株)

〒103-0001 中央区日本橋小伝馬町16-2
電話:03-5695-3130 mind-pc@newspt.co.jp
http://www.newspt.co.jp

対象とする業種ごとに、以下のコンテンツと、それを加工・修正できるソフトウェアとをご提供します。

コンテンツは、

「標準業務プロセスモデル」から構成されます。
「業務設計ガイド」

標準業務プロセスモデルは、業務プロセスを階層的かつ論理的に整理したものです。業務設計ガイドは、標準業務プロセスモデルを使って、新しい業務実施方法や、システムを検討する際に参考になる情報を提供するものです。

全業務を体系的に整理した標準業務プロセスモデル

- 標準業務プロセスモデルは、業務を3階層で整理した業務機能体系図と、その下位レベルの1ないし2階層の業務プロセスフローとで構成されています(P.1 図1「PDRの全体関連図」)。
- 経営計画立案プロセスや総務業務など、通常はコンピュータ処理の対象にならないような業務を含め、すべての経営機能を対象としています。
- 業務機能体系図は、全社レベルの経営機能を俯瞰できるマクロレベルから、順次、ミドルレベル、マイクロレベルへとブレイクダウンしていくようになっています(P.6 図2「マクロレベル体系図」、P.7 図3「ミドルレベル体系図」、P.8 図4「マイクロレベル体系図」)。
- 業務機能体系図は、具体的な業務の実施方法に左右されない論理レベルの業務体系であり、その機能は経営として必ず備えているべきものです。したがって、かなり不変的なものです。
- 業務プロセスフローは、マイクロレベルの業務機能体系図の下位レベルに位置づけられ、通常の場合、このようなプロセスで業務が実施されるという論理レベルのプロセスフローです(P.9 図5「業務プロセスフロー」)。
この下位レベルに、実際の業務処理方法である物理レベルの業務処理ないし業務フローが存在します。
- 業務機能体系図または業務プロセスフローでは、他の業務機能体系図または業務プロセスフローと関係がある場合は、その関連を示しています(P.10 図6「マイクロレベルでの他のブロックとの関連」)。

それぞれの業務プロセスの具体的な実施方法を整理したり、設計するための業務設計ガイド

- 業務プロセスフローを構成する各業務（これを業務ブロックと言います）に対して、業務記述ワークシートが提供されます（図7「業務記述ワークシート」）。

◆ 図7 業務記述ワークシート

PDR業務記述ワークシート			
作成対象	調達物流センタ入荷 X020D07D01D04		
業務プロセス名	説明	入力	出力
調達物流センタ入荷の積荷確認 F01	入荷作業指図および送り状と積み荷を照合確認する。	調達物流センタ入荷作業指図、送り状、積み荷	確認済調達物流センタ入荷作業指図・送り状・積み荷
実態		改善策	
where(事業所・部門)			
who(担当)			
when(タイミング)			
what(内容)	X020D07D01D04F01 「調達物流センタ入荷確認」の「業務記述ワークシート」です。		
how(方法)			

- 業務記述ワークシートには、その業務ブロックの説明、入力、出力、業務記述欄があります。業務記述欄は、現状の業務実施方法や改善案、パッケージの提供する業務実施方法などを記述することができます。
- 業務を改善する着眼点（「業務改善・改革の着眼点」）を、該当するレベルの業務機能体系図または業務プロセスフローの業務ブロックに対して提供しています（図8「業務改善・改革の着眼点」）。

◆ 図8 業務改善・改革の着眼点

- さらに、業界ないし業務専門用語の解説（「専門用語解説」）を、それを必要とする業務機能体系図または業務プロセスフローの業務ブロックに対して提供しています（図9「専門用語解説」）

◆ 図9 専門用語解説

- PDRのご利用者に対するサービスとして「インターネットによるQ&A」があります。これはPDRのHP (<http://www.newspt.co.jp/data/bmodel/pdr/pdr.html>) 経由で、PDRの内容や利用方法に関する質問やご意見の提示を行うことができるサービスです。

2 PDRのご利用目的

PDRは以下の目的にご利用いただくことができます。

- 業務の実態把握
- 業務の設計
- ERP/SCMの検討
- 業務ノウハウの蓄積
- 業務マニュアル整備
- 業務知識習得

業務の実態把握

新システム開発または改善の検討に際し、現状がどうなっているかを調査するフレームとしての利用

- 漠然と「どのように業務をなさっていますか」と聞いていくのではなく、「業務の基本的な流れはこうなっているはずですが、どうですか？ それでは、まず初めのこの業務について教えてください」というように聞いていくことによって、相手の信頼感を得ながら、効率的でもれのないインタビューを実施することができます。
- その調査過程で出てくる専門用語についても、いちいち確認することなく、効率的に調査を実施することができ、または分かったふりをして話を的確に理解し損なうということを避けることができます。
- その業務に関連する他の業務が示されていますから、その関連を含めて調査・分析することが可能です。

業務の設計

同じく、新システム案ないし改善策を検討する際のフレームとしての利用

- 業務が構造的に整理されていますので、新システムのシステムやサブシステムの単位を適切に設定する際の参考になります。
- 網羅性のある業務機能体系図や業務プロセスフローに沿って、「ここは対象としなくてよいのか、この処理方法でよいのか」と検討していくことによって、断片的でない首尾一貫したシステムとすることができず。
- 同時に、必要な機能を見落とすこともなくなります。
- 業務機能体系図または業務プロセスフロー上に関連する業務が示されていますので、インタフェースをとるべきシステムや機能を押さえることができます。
- 「その道の専門家」ないしプロの経験則である「業務改善・改革の着眼点」を利用することにより、的確に改善策ないし新システム案を検討することができます。これにより、レベルの低いシステムを作ってお客様(システムの利用者)からの評価を下げるということが避けられます。

ERP/SCMの検討

ERPパッケージなどを利用する開発あるいはSCM開発の場合、新システムの機能を検討するマップとしての利用(現状とパッケージとの機能対比や、それを受けての新システム案検討を行う)

- 一般的にパッケージが提供している機能はコア機能であって、検討している対象範囲の全機能を提供しているわけではありません。そこで、検討の枠組みとしては、より客観的な、検討対象範囲の全機能が整理されているものを採用すべきです。このことにより、必要な機能を見落とすことがなくなります。
- SCMシステム等の検討の際も、PDRにすべての業務機能の白地図(マップ)が用意されていますので、関連する業務をもれなく押さえることができます。
- インタフェースをとるべきシステムや機能を確実に押さえることにも貢献します。
- 「業務改善・改革の着眼点」は、パッケージの機能・処理方法を無差別に受け入れるのではなく、別の視点からの検討を試みる手がかりとなります。

業務ノウハウの蓄積

業種・業務に専門特化するための業務ノウハウを蓄積するフレームとしての利用

- 情報サービス業殿にとっては、これからはいずれかの分野に明確な強み・特色を持つ必要があります。
- いわゆるアプリケーションで強み・特色を作ろうとする場合は、業種・業務を絞り込む必要があります。
- 絞り込んだ分野について、そのノウハウを個人レベルではなく、企業の財産として蓄積していく必要があります。その整理ボックスの役割を、PDRが果たします。
- 「業務改善・改革の着眼点」や「専門用語解説」は、初期の内容をもとにどんどん充実させていくことができるはずです。

業務マニュアル整備

業務マニュアル・規程基準類等を作成・利用するフレームとしての利用

- 業務マニュアルは、自分の担当業務についてはそれを検索する必要はありません。しかし他人や管理者が業務マニュアルを見ようという場合は、「どのマニュアルを見ればよいのか」がすぐには分からないはずです。そこで、このPDRを利用して業務機能体系図や業務ブロックにひもつけて業務マニュアルを作成しますと、その検索が容易に可能となります。どの業務のマニュアルが有って、どの業務のマニュアルが無いということも明瞭になります。
- また、既存の業務マニュアルや規程・基準類等をこのPDRにひもつけておけば、必要なものを容易に探し出し参照することが可能となります。図10にその例を示します。
- 業務機能体系図や業務プロセスフローは自由に変更することができますから、実態に合わせてご利用いただくことが可能です。

業務知識習得

業務知識を得る教材としての利用

- 業務知識を得るためには、その業務の解説書を勉強・研究したり、演習をしたりします。しかし、勉強する側の頭の中に「地図」ができていないと、なかなか吸収できません。「知識」が断片的で、頭の中に入っていないのです。そこで、このPDRを「地図」にして、「知識」を業務機能体系図や業務プロセスフローにひもづけながら勉強・研究をしていただきますと、業務知識を効率的にしかも有効に活用可能な状態で習得することが可能となります。

- 以上のPDRの利用目的とPDRの内容との関連を示しますと、以下のとおりとなります。

有効なPDRのご利用機能	業務プロセスフロー	業務記述ワークシート	業務改善・改革の着眼点	専門用語解説	Q&Aインターネットによる
ご利用目的					
業務の実態把握	○	○	(○)	○	○
業務の設計	○	○	○	○	○
ERP/SCMの検討	○	○	○	○	○
業務ノウハウの蓄積	○	○	○	○	○
業務マニュアル整備	○	(○)			
業務知識習得	○	○	○	○	○

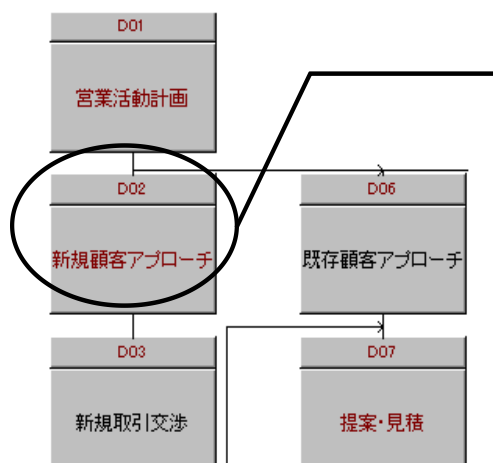
3 PDRのご利用方法・ご利用環境

- PDRのご利用には、以下の環境が必要です。

Windows95 (-97)
Microsoft Excel 97 (-2000)
Microsoft Word 97 (-2000)
CPU速度：200MHz以上
メモリ容量：32MB以上
ディスク容量：最小5MB～最大350MB

- プログラムファイルは2MB強です。コンテンツのうち、標準業務プロセスモデル（着眼点・用語などを含む）は1業種当たり2MBです。業務記述ワークシート（1業種当たり30MB）は、必要なときにセットアップしてください。
- 業務プロセスモデルは、追加・変更・削除と業務プロセス間のリンクが可能で、したがって、利用目的別に幾つもの専用バージョンを作成することが可能です。

◆ 図10 関連する業務マニュアルを業務プロセスから検索する例



付帯情報の表示/変更

ブロックコード: D02 ブロック名称: 新規顧客アプローチ [OK]

補足説明文

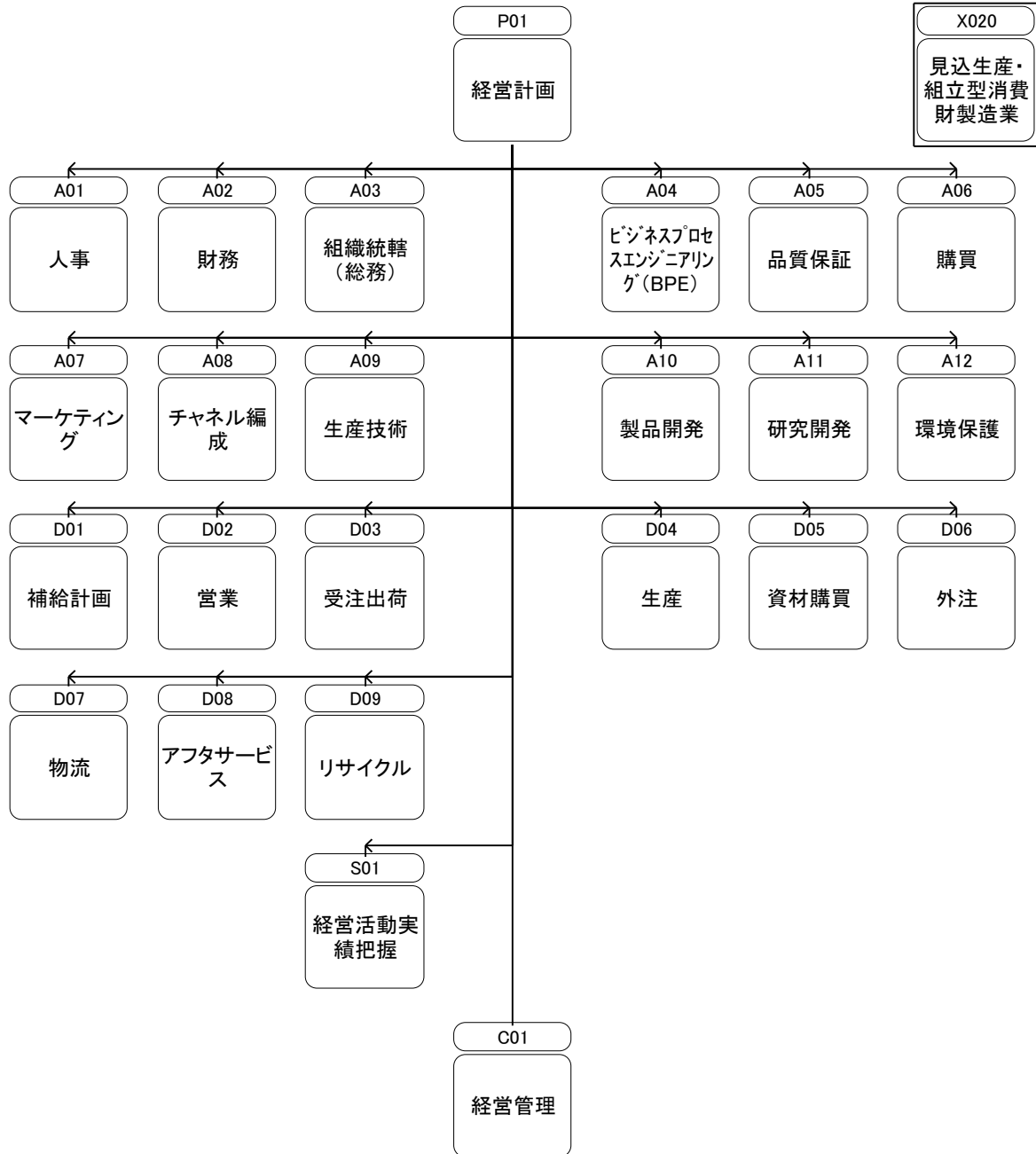
着眼点
 専門用語
 補足説明文
 説明文

4 ご利用料金

- ご利用料金は1CD-ROM当たり10万円です。
- CD-ROMがセットされていない状態では、PDRをご利用いただくことはできません。（したがって1CD-ROMでは、同時にご利用いただけるのは1台のみです）。
- 対象業種追加、機能向上等のバージョンアップを行いますが、新バージョンをご希望であれば新たにお求めいただきます（1CD-ROMあたり10万円）。
- 新しいバージョンのCD-ROMでも、旧バージョンのシステムを操作できますが、古いバージョンのCD-ROMでは新バージョンのシステムを操作することはできません。
- PDRをご利用のお客様には、随時、新バージョンの情報をE-Mailでご連絡いたします。

◆ 図2 マクロレベル体系図

PDR	作成単位		作成年月日	作成者	番号
	業種				
業務機能体系図 (マクロレベル)	マクロ	X020 見込生産・組立型消費財製造業			
X020	ミクロ				
	フロー				



◆ 図3 ミドルレベル体系図

PDR	作成単位		作成年月日	作成者	番号
	業種				
業務機能体系図	マクロ	X020 見込生産・組立型消費財製造業			
(ミドルレベル)	ミドル	D07 物流			
X020D07	ミクロ				
	フロー				



D07「物流」の
「ミドルレベル業務機能体系図」です。

業務ブロック番号をクリックすると、
その下位の業務機能である
「マイクロレベル業務機能体系図」に
展開されます。
ここでは、D01「調達物流センター業務」
を選択します。

◆ 図4 ミクロレベル体系図

PDR	作成単位		作成年月日	作成者	番号
	業種				
業務機能体系図 (ミクロレベル)	マクロ	X020 見込生産・組立型消費財製造業			
	ミドル	D07 物流			
	ミクロ	D01 調達物流センタ業務			
X020D07D01	フロー				



業務名称をクリックすると「業務改善・改革の着眼点」「専門用語」等の付帯情報が参照できます。ここでは、D04「調達物流センタ入荷」を参照します。

D01「調達物流センタ業務」の「ミクロレベル業務機能体系図」です。

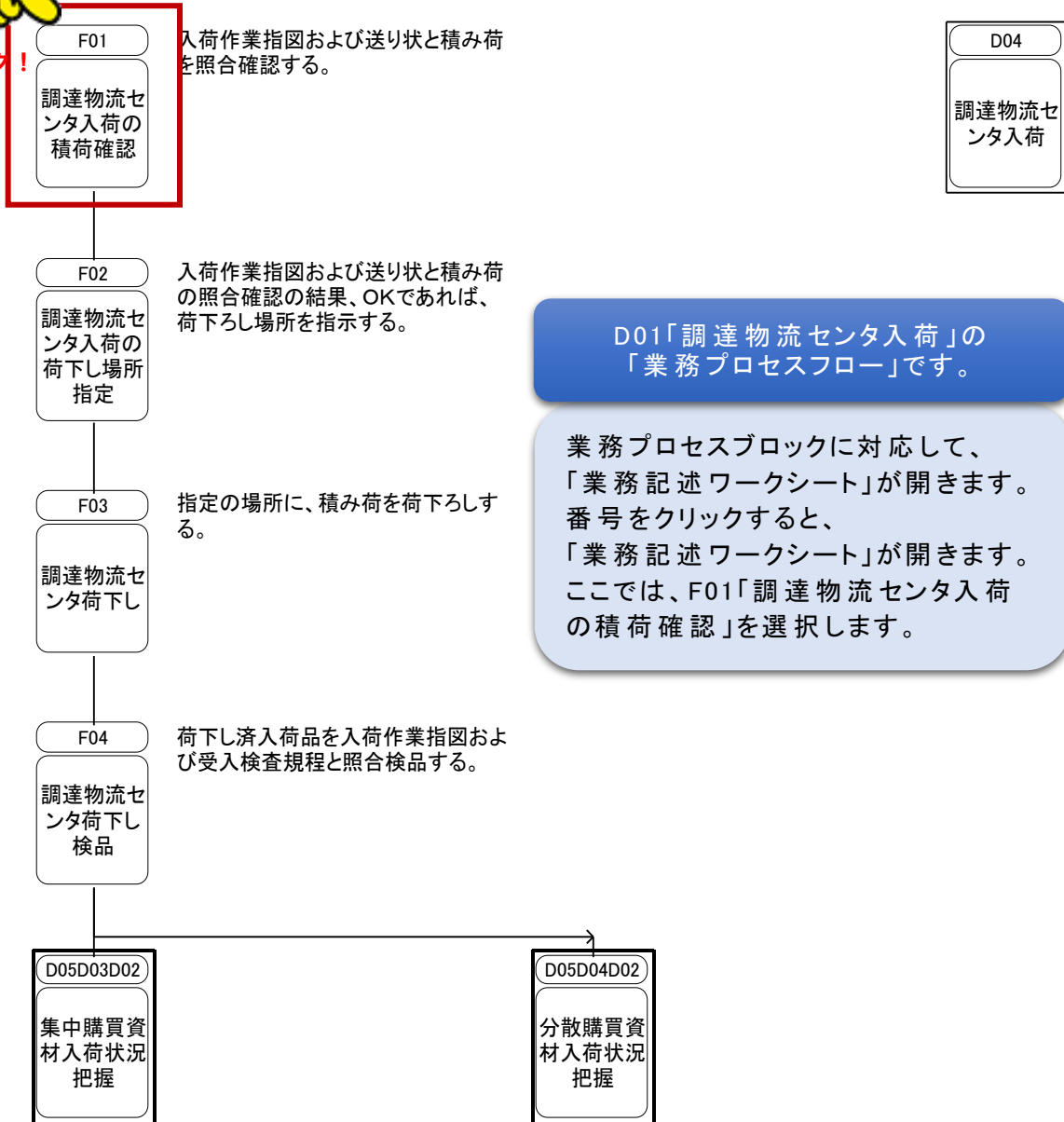
業務ブロック番号をクリックすると、その下位の業務機能である「業務プロセスフロー」に展開されます。ここでは、D04「調達物流センタ入荷」を選択します。

◆ 図5 業務プロセスフロー

PDR	作成単位		作成年月日	作成者	番号
	業種				
	X020	見込生産・組立型消費財製造業			
	マクロ	D07 物流			
業務プロセスフロー	ミドル	D01 調達物流センタ業務			
X020D07D01D04	ミクロ	D04 調達物流センタ入荷			
	フロー				



クリック!



D01「調達物流センタ入荷」の「業務プロセスフロー」です。

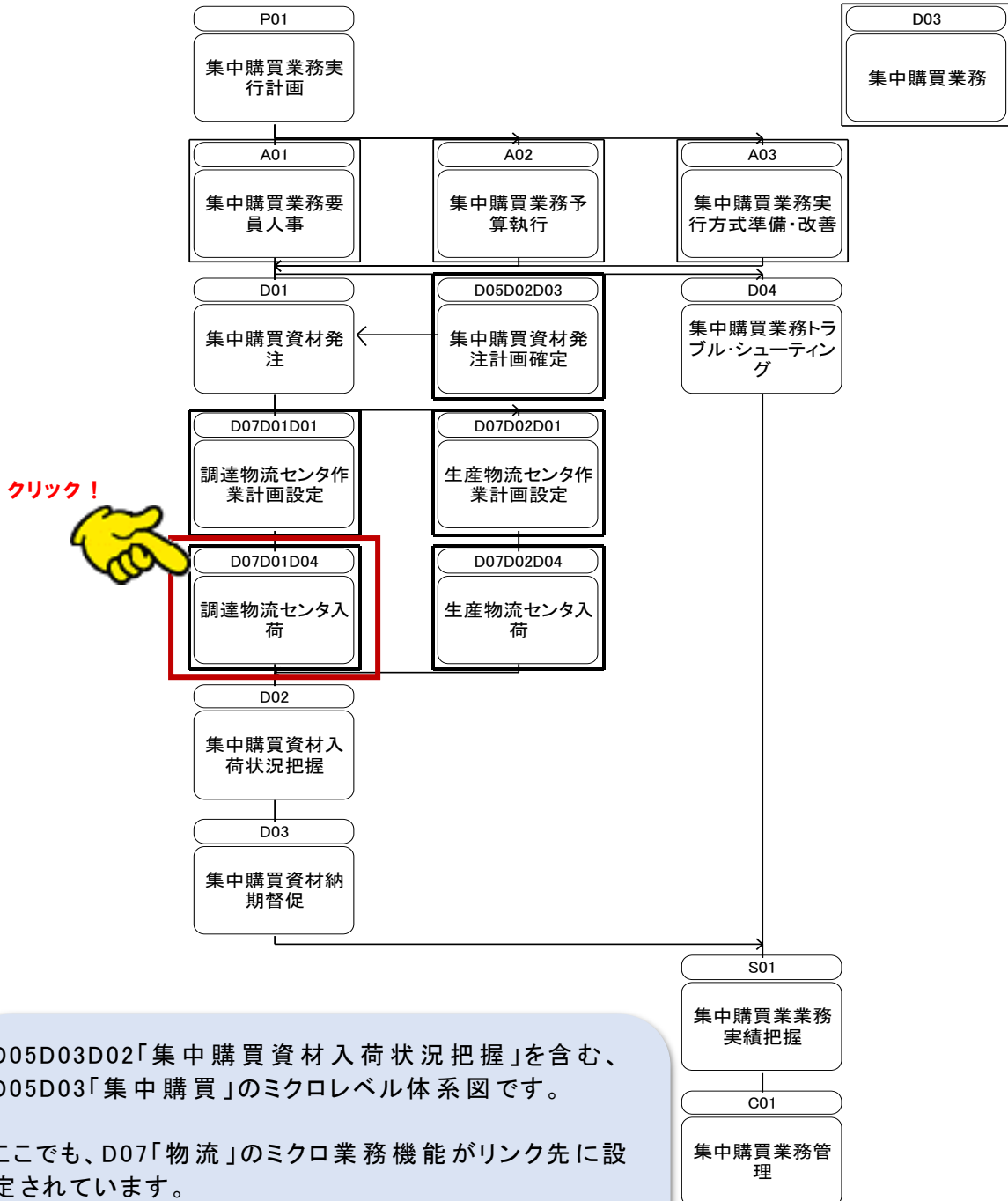
業務プロセスブロックに対応して、「業務記述ワークシート」が開きます。番号をクリックすると、「業務記述ワークシート」が開きます。ここでは、F01「調達物流センタ入荷の積荷確認」を選択します。

D05D03D02「集中購買資材入荷状況把握」、D05D04D02「分散購買資材入荷状況把握」は、マクロレベル業務機能のD05「資材購買」の業務ブロックです。

D07「物流」と連続する業務としてリンクを設定しています。D05D03D02「集中購買資材入荷状況把握」の業務ブロック番号をクリックすると、その業務を含む「業務機能体系図」または「業務プロセスフロー」にジャンプします。

◆ 図6 ミクロレベルでの他のブロックとの関連

PDR	作成単位		作成年月日	作成者	番号
	業種				
業務機能体系図 (ミクロレベル)	X020	見込生産・組立型消費財製造業			
	マクロ	D05 資材購買			
	ミドル	D03 集中購買業務			
X020D05D03	ミクロ				
	フロー				



D05D03D02「集中購買資材入荷状況把握」を含む、D05D03「集中購買」のミクロレベル体系図です。

ここでも、D07「物流」のミクロ業務機能がリンク先に設定されています。

D07D01D04「調達物流センター入荷」の業務ブロック番号をクリックすると、D07D01「調達物流センター業務」のミクロレベル体系図に戻ります。

1. PDR の利用目的 (Why)

業務の実態把握	❖ 新システム開発または改善の検討に際し、現状がどうなっているかを調査するフレームとしての利用(的確かつ効率的に、信頼感を得て実施できる)
業務の設計	❖ 同じく、新システム案ないし改善策を検討する際のフレームとしての利用(検討のもれを防げる)
ERP/SCM の検討	❖ ERP パッケージなどを利用する開発あるいは SCM 開発の場合、新システムの機能を検討するマップとしての利用(現状とパッケージとの機能対比や、それを受けての新システム案検討を行う)
業務ノウハウの蓄積	❖ 業種・業務に専門特化するための業務ノウハウを蓄積するフレームとしての利用(業務ノウハウを企業の財産とすることが可能)
業務マニュアル整備	❖ 業務マニュアル・規程基準類等を作成・利用するフレームとしての利用
業務知識習得	❖ 業務知識を得る教材としての利用

2. PDR の製品・サービス内容 (What)

- ❖ 全業務を体系的に整理した業務プロセスモデル
- ❖ それぞれの業務プロセスの具体的な実施方法を整理したり、設計するための業務設計ガイド
- ❖ インターネットによるQ&Aサービス

4. PDR のご利用方法 (How)

- ❖ PDR の利用には Excel97、Word97 以上が必要です。
- ❖ ご利用環境としては、以下をお勧めします。
 - CPU 速度 200Mhz 以上
 - メモリ容量 32MB 以上

5. PDR の開発者・販売者 (Who)

開発者	販売者
<ul style="list-style-type: none"> • ㈱Nix システム研究所 (代表取締役 吉原賢治) • 三井造船システム技研㈱ • マインドリサーチ㈱ (現システム企画研修㈱) 	<ul style="list-style-type: none"> • 三井造船システム技研㈱ • システム企画研修㈱

6. PDR のご提供時期 (When)

- ❖ 製品としてのご提供開始
 - V1.0 …………… 1999 年 7 月
 - V1.1 …………… 1999 年 12 月
 - V1.2 …………… 2000 年 3 月

7. PDR のご利用料金 (How Much)

- ❖ 1CD-ROM 当たり 100,000 円(税別)
 - 複数枚ご購入の場合の料金につきましてはお問い合わせください。

- ▶ この PDR は情報処理振興事業協会の開発助成制度を利用して開発しています。
- ▶ 詳細はPDR専用 HP をご参照ください。
<http://www.newspt.co.jp/data/pdr/index.html>

3. PDR の対象業種・業務 (Where)

業種
<ul style="list-style-type: none"> • 見込生産・組立型消費財製造 • 受注生産・部品製造 • 見込生産・装置型消費財(化学製品)製造 • 見込生産・装置型消費財(発酵食品)製造 • 見込生産・装置型消費財(医薬品)製造 • エンジニアリング • 日常生活財卸売 • チェーン・ストア(GMS) • レストラン・チェーン • 情報サービス

業種	適用可能な製造業
見込生産・組立型消費財製造業	<ul style="list-style-type: none"> • 家電 • 情報通信機器 • 精密機器 • 玩具 • 自転車など
受注生産・部品製造業	<ul style="list-style-type: none"> • 自動車部品 • 家電部品 • 情報通信機器部品 • 精密機器部品など
見込生産・装置型消費財(発酵食品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> • 食品醸造 • 酒類醸造 • バイオ薬品製造など
見込生産・装置型消費財(化学製品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> • トイレタリ • 飲料など
見込生産・装置型消費財(医薬品)製造業	<ul style="list-style-type: none"> • 医薬品 • 化粧品など

業務
<ul style="list-style-type: none"> • 企業の全業務 情報システムやコンピュータ処理と関係ない業務も含まれます。